3月2日(日)

令和七年度　B日程入学試験問題

文学部（日本文学科・中国文学科・史学科）、人間開発学部

古　典（古文・漢文）

—注意事項—

1　問題は1ページから10ページ、解答用紙は一枚である。

2　解答はすべて別紙解答用紙に記入すること。

3　試験時間は六〇分である。

1 この問題は 1 ～ 20 に解答すること。

次の文章は『源氏物語』の一節である。急逝した正妻の実家で長く喪に服していた男君が、そこを辞去して院のもとを尋ね、その後、久しぶりに自邸（二条院）に帰る場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（60点）

院へ参りたまへれば、「いといたう面痩せにけり。精進にて日を経る故にや」と心苦しげに(1)思しめして、御前にて物などまゐらせたまひて、とやかくやと思しあつかひきこえさせたまへるさま、(a)あはれにかたじけなし。中宮の御方に(2)参りたまへれば、人々めづらしがり見たてまつる。命婦の君して、「思ひ尽きせぬことどもを、ほど(X)経るにつけてもいかに」と御消息(3)聞こえたまへり。「(b)常なき世はおほかたにも思うたまへ知りにしを、目に近く見(4)はべりつるに、厭はしきこと多く、思ひたまへ乱れしも、たびたびの御消息に慰めはべりてなむ今日までも」とて、(c)さらぬをりだにある御気色とり添へて、いと心苦しげなり。無紋の表の御衣に鈍色の御下襲、纓巻きたまへるやつれ姿、華やかなる御装ひよりも(d)なまめかしさまさりたまへり。春宮にも久しう参らぬおぼつかなさなど聞こえたまひて、夜更けてぞまかで(5)たまふ。

二条院には、方々払ひ磨きて、男、女待ちきこえたり。上臈どもみな参上りて、我も我もと装束き化粧じたるを見るにつけても、かのゐ並み屈じたりつる気色どもぞあはれに思ひ出でられたまふ。(e)御装束奉りかへて西の対に渡りたまへり。更衣の御しつらひ曇りなくあざやかに(一)見えて、よき若人、童べのなり、姿めやすくととのへて、少納言がもてなし(f)心もとなきところなう心にくしと見たまふ。

姫君、いとうつくしうひきつくろひておはす。「久しかりつるほどに、いとこよなうこそおとなびたまひ(l)にけれ」とて、小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、うち側みて恥ぢらひたまへる御さま(g)飽かぬところなし。灯影の御かたはら目、頭つきなど、ただかの心尽くしきこゆる人に違ふところなくもなりゆくかな、と見たまふに(h)いとうれし。近く寄りたまひて、おぼつかなかりつるほどのことどもなど聞こえたまひて、「(i)日ごろの物語のどかに聞こえまほしけれど、いまいましうおぼえはべれば、しばし他方にやすらひて(Y)参り来む。今はと絶えなく見たてまつるべければ、(j)厭はしうさへや思されむ」と語らひきこえたまふを、(k)少納言はうれしと聞くものから、なほあやふく思ひきこゆ。やむごとなき忍び所多うかかづらひたまへれば、またわづらはしきやたちかはりたまはむと思ふぞ、憎き心なるや。

（注）○院―先の帝。男君の実父。　○中宮―院の后。男君の義母。　○人々―中宮付きの女房たち。
○命婦の君―中宮付きの女房の一人。　○無紋―文様が無いこと。喪服。　○纓―冠の装身具。うしろに長く垂れるもの。
○春宮―院と中宮の皇子。次の帝。　○男、女―二条院の召使いの男女。　○上﨟―格の高い女房。
○かのゐ並み屈じたりつる気色ども―亡き妻の実家の沈んだ様子をいう。　○西の対―男君が自邸に引き取っている姫君の居所。
○若人、童べ―西の対にいる若い女房や女童。　○少納言―姫君の乳母。

問一　波線部(1)～(5)の敬意の対象の組み合わせとして最もふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、解答欄 **1** にマークしなさい。

ア　(1)院　(2)中宮　(3)男君　(4)中宮　(5)男君
イ　(1)院　(2)男君　(3)中宮　(4)中宮　(5)男君
ウ　(1)院　(2)中宮　(3)男君　(4)男君　(5)院
エ　(1)男君　(2)男君　(3)中宮　(4)男君　(5)春宮
オ　(1)男君　(2)中宮　(3)男君　(4)男君　(5)中宮

問二　傍線部(a)は誰のどういう行為について言ったものか。最もふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、解答欄 **2** にマークしなさい。

ア　男君が院に対して多くの贈り物をしていること
イ　男君が院に対して無理なお願いをしていること
ウ　男君が院に対して何かと迷惑をかけていること
エ　院が男君に対してあれこれと気遣いをしていること
オ　院が男君に対して何度も手紙を送ったこと

問三　傍線部 (b)・(i) の現代語訳として最もふさわしいものを、次の **ア**〜**オ** の中から一つ選び、(b) は解答欄 **3** に、(i) は **4** にマークしなさい。

(b)

ア　無常な世であるということはある程度疑っておりましたので
イ　無常な世であるということはまったく理解しておりませんでしたので
ウ　無常な世であるということを一通りは理解しておりましたが
エ　無常な世であるということを少しも理解なさっていないようでしたが
オ　無常な世であるということを少しは理解なさっていると思っておりましたが

(i)

ア　日頃耳にする物語を静かに味わいたいと思っていましたが、今がまさにその時ですので
イ　平凡な日常の物語をあれこれと書きとめたいのですが、あまり面白いとは思えませんので
ウ　平凡な日常の物語をゆっくりとお話ししますと、不機嫌になると思われますので
エ　ここ数日の出来事をいろいろと申し上げますと、不愉快な思いをなさいますので
オ　ここ数日の出来事をのんびりと申し上げたいのですが、不吉な感じに思われますので

問四　傍線部 (c) の示す具体的な内容は何か。最もふさわしいものを、次の **ア**〜**オ** の中から一つ選び、解答欄 **5** にマークしなさい。

ア　院と対面することのない折
イ　中宮のもとから離れていない折
ウ　妻の実家にいない折
エ　妻との死別を嘆いていない折
オ　二条院に戻っていない折

問五　傍線部 (d)・(e) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア〜オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(d) は解答欄 6 に、(e) は 7 にマークしなさい。

(d)

ア　悲しい様子が際立っていらっしゃる
イ　優雅な様子が秀でていらっしゃる
ウ　若々しい様子が無くなっていらっしゃる
エ　女性らしさが目立っていらっしゃる
オ　艶っぽさが失われていらっしゃる

(e)

ア　衣装を差し上げなさって
イ　更衣に奉仕する人をお変え申し上げて
ウ　更衣に奉仕する人を変えなさって
エ　衣装をお捨て申し上げて
オ　衣装をお取り替えになって

問六　傍線部 (f) のように感じたのはなぜか。最もふさわしいものを、次の ア〜オ の中から一つ選び、解答欄 8 にマークしなさい。

ア　西の対では、季節にあわせた部屋の飾り付けがあざやかで、部屋にいる者の身なりも整えられていたから。
イ　西の対では、季節にあわせた部屋の飾り付けがあざやかだが、部屋にいる者の衣装が立派すぎて落ち着かないから。
ウ　西の対では、更衣が適切になされていて、部屋にいる者の衣装もあざやかだが、喪服を着ている男君にとっては不審に思われたから。
エ　二条院では、各部屋を掃き清めていて、誰もがみな立派な衣装を着飾って化粧もして男君を出迎えたのがうれしかったから。
オ　二条院の人々の、みなが着飾っている様子が、亡き妻の実家の様子とはあまりに異なるので、物足りなく思ったから。

問七　傍線部 (g) は、誰のどのような様子に対して述べたものか。最もふさわしいものを、次の **ア**～**オ** の中から一つ選び、解答欄 **9** にマークしなさい。

ア　姫君が御几帳を引き上げてこちらを見ている様子。
イ　姫君が傍らから離れずに大人びた振る舞いをしている様子。
ウ　姫君が横を向いて男君と目をあわせずに恥じらっている様子。
エ　久しぶりに訪れた男君が照れくさそうにしている様子。
オ　男君が御几帳を引き上げて中をのぞき込んでいる様子。

問八　傍線部 (h) のように感じたのはなぜか。最もふさわしいものを、次の **ア**～**オ** の中から一つ選び、解答欄 **10** にマークしなさい。

ア　姫君の横顔や髪型が、男君が心から慕っている人にそっくりになってきたから。
イ　姫君が、男君が思う通りの化粧をし、髪飾りを付けている様子がかわいらしいから。
ウ　明かりに映し出された姫君の黒い影が男君の理想の女性を思い出させるものであったから。
エ　明かりの側にいる姫君の目つきや頭の形などが随分と大人びてきたものだと見えたから。
オ　少納言が心を尽くして世話をしたお陰で、姫君が理想の女性像に近づいてきたから。

問九　傍線部 (j) はどういうことを言っているか。最もふさわしいものを、次の **ア**～**オ** の中から一つ選び、解答欄 **11** にマークしなさい。

ア　男君が別室に行くと言ったことで、姫君に嫌われてしまうのではないか、ということ
イ　男君が姫君とずっと一緒にいることで、かえって姫君がいやな思いをするのではないか、ということ
ウ　男君が姫君を大切にするあまり、まわりが不快な思いをしているのではないか、ということ
エ　少納言が姫君の面倒を見続けることで、かえって姫君が煩わしく思っているのではないか、ということ
オ　少納言が他の家に仕えることになったため、姫君がつらい思いをするのではないか、ということ

問十　傍線部 (k) のように少納言が思ったのはなぜか。最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 12 にマークしなさい。

ア　姫君の男君への言葉はうれしいと思ったが、男君のそっけない態度が気がかりであったから。
イ　姫君の男君への言葉を喜んで聞いていたが、あまりにも強い男君への思いに怖さを感じたから。
ウ　男君の姫君への思いはうれしいが、姫君はまだ男君の言葉を危険なものと感じているようだから。
エ　男君の姫君への思いはうれしいものの、正妻を失ったばかりの男君の精神状態が不安定に思われるから。
オ　男君の姫君への思いを喜びつつも、男君が忍んで通う高貴な女性達の存在を思うと不安が募るから。

問十一　二重傍線部 (一)・(二) の「に」の文法的説明として最もふさわしいものを、次の ア～キ の中からそれぞれ一つずつ選び、(一) は解答欄 13 に、(二) は 14 にマークしなさい。

ア　格助詞　　イ　接続助詞　　ウ　完了の助動詞　　エ　断定の助動詞　　オ　副詞の一部
カ　動詞の一部　　キ　形容動詞の一部

問十二　二重傍線部 (X)「経る」・(Y)「参り来」の、
1　活用の行　　2　活用の種類　　3　活用形
は何か。該当するものを、次の ア～カ の中からそれぞれ一つずつ選び、(X) の 1 は解答欄 15 に、2 は 16 に、3 は 17 に、(Y) の 1 は解答欄 18 に、2 は 19 に、3 は 20 にマークしなさい。

1　ア　カ行　　イ　サ行　　ウ　ハ行　　エ　マ行　　オ　ヤ行　　カ　ラ行
2　ア　四段活用　　イ　上一段活用　　ウ　上二段活用　　エ　下一段活用　　オ　下二段活用　　カ　変格活用
3　ア　未然形　　イ　連用形　　ウ　終止形　　エ　連体形　　オ　已然形　　カ　命令形

2 この問題は、解答欄 21 ～ 29 に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。（40点）

周処年少ノ時、兇強侠気、為ニ郷里ノ所レ患。又義興水中ニ有レリ蛟、山中ニ有ニ遭跡虎、並ビニ皆暴ニ犯ス百姓。義興ノ人謂ヒテ為シ三横、而シテ処尤ト劇。(1)‖ 或ヒト説キテレ処ニ殺シレ虎ヲ斬キラシムレ蛟ヲ。実ハ(a)こひねがへバナリ三横唯ダ余ニ其ノ一ヲ。処即チ刺ニ殺シ虎ヲ、又入リテレ水ニ撃ツレ蛟ヲ。蛟或イハ浮キ或イハ没シ、行クコト数十里、処与レ之ニシ俱ニ経タリ三日三夜ヲ。郷里皆謂ヒテ已ニ死セリト、(Y)〜 更ニ相慶ヨロコブ。竟ニ殺シテレ蛟ヲ而デ出ヅ、聞キ里人ノ相慶ブヲ、始メテ知リレ為リシヲ人情ノ所トレ患フルニ、(b)有リ自ラ改ムルノ意ヲ。乃チ入リレ呉ニ尋ヌ二陸ヲ。平原不レ在ラ、正ニ見マミユ清河ニ。具サニ以テレ情ヲ告ゲ、並ビニ云フ、欲スルモ自ラ修改セント。而年已ニ蹉タリ跎タリ。(X)〜 且(Z)〜 終ニ無カラント所レ成スト。清河曰ク、古人貴ブニ朝ニ聞キテ夕ベニ死スルヲ、況ンヤ君前途尚ホ可シ。(c)人ハ患フニ志之レヲ不ルヲ立タ。亦何ゾ憂ヘニ令名ノ不ルヲ彰アラハレ邪ト。処遂ニ自ラ改励シ、終ニ為ニ忠臣孝子ト。

（『世説新語』）

（注）○周処―人名。　○兇強俠気―凶暴で自分の力を頼みにしていること。　○義興―地名。
○蛟―龍の一種で四足あり、大水をおこすといわれる。　○遉跡虎―あちこちに出没する虎。　○百姓―義興の人々。
○三横―三つの横暴な存在。
○二陸―呉出身の陸機・陸雲兄弟のこと。人々の尊崇を集めた。後ろに出てくる「平原」は陸機を、「清河」は陸雲をいう。
○蹉跎―何かを行う機会を失うこと。
○朝聞夕死―『論語』里仁篇にみえる言葉。「朝に道を聞いたならば、その晩に死んでもかまわない」の意。　○令名―名声や評判。

問一　波線部(X)～(Z)の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次の**ア**～**エ**の中からそれぞれ一つずつ選び、(X)は解答欄 21 に、(Y)は 22 に、(Z)は 23 にマークしなさい。

(X)　21
ア　しかるに
イ　すなはち
ウ　つひに
エ　よりて

(Y)　22
ア　はなはだ
イ　そもそも
ウ　しばしば
エ　こもごも

(Z)　23
ア　もし
イ　しかうして
ウ　かつ
エ　むしろ

問二　二重傍線部(1)と同じ意味で使われている熟語として最もふさわしいものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、解答欄 24 にマークしなさい。

ア　劇団
イ　劇甚
ウ　悲劇
エ　観劇

問三　傍線部 (a) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄 25 にマークしなさい。

ア　実は三横のうち一つを残すだけにならないかと願っていたのであった。
イ　実は一つも三横が残ることのないようにと願っていたのであった。
ウ　三横のうち一つを周処に滅ぼして欲しいと願っていたのであった。
エ　三横のうち一つは残してやって欲しいと周処にお願いしたのであった。

問四　傍線部 (b) に「知」とあるが、何を知ったのか。最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄 26 にマークしなさい。

ア　虎を殺し蛟を遠くに追いかけて三日三晩たったこと。
イ　人々が自分の行動に関して二陸に相談していたこと。
ウ　人々に自分の乱暴な振る舞いが嫌われていたこと。
エ　人々が自分の勇気ある行動を喜んでくれていたこと。

問五　傍線部 (c) の書き下し文として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄 27 にマークしなさい。

ア　況んや君の前途を尚ぶべし。
イ　況んや君の前途尚ほ可なるをや。
ウ　況んや君の前に尚ほ可とする途ならん。
エ　況んや君途を前にするを尚ほ可とす。

問六　傍線部 (d) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄 28 にマークしなさい。

ア　志を立てることなど気にしない。それはやがて自分の名声があらわれることにつながるだろう。

イ　志が立たないことを心配する必要はない。当然、自分の名声があらわれないことも気にする必要はない。

ウ　志が立たないことよりも、自分の名声があらわれないことを心配した方がよいだろう。

エ　志が立たないことを心配すべきである。まして自分の名声があらわれないことなど気にすることではない。

問七　本文の内容として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄 29 にマークしなさい。

ア　周処は虎や蛟を退治することに成功して義興の人々から大変喜ばれたが、さらに努力を続けて忠臣孝子となった。

イ　周処は人々が嫌う三横を殺してから忠臣孝子となるためにどうすればよいか、陸雲に助言を求めた。

ウ　周処は虎や蛟を退治したが自分も人々から嫌われていることを知り、陸雲の助言を受けて自分の行いを改め、忠臣孝子となった。

エ　周処は自分の行いを改めるため陸雲に助言を求めたが、もはや年を取り過ぎているといわれてしまった。